

館林市埋蔵文化財発掘調査報告書 第12集

上ノ前遺跡発掘調査報告書
KAMINOMAE

1984

館林市教育委員会

例　　言

1. 本書は、館林市大字赤生田字上ノ前に所在する上ノ前遺跡の確認調査の概要をまとめたものである。
2. 本確認調査は、河川改修に先だつ台帳に登載されていない遺跡の確認調査である。
3. この確認調査の主体は、館林市教育委員会で、その組織は次の通りである。

教育長　堀越　亘

教育次長　島田　勇吉

担当主管　館林市教育委員会　文化振興課　文化財保護係

課長　森田　茂

係長　三田　正信

社教主事　落合　敏男（昭和59年6月まで）

小林　一吉（昭和59年7月より）

学芸員　岡屋　英治（担当）

主事　石井　洋史

調作作業員　藤坂和延・萩原毅・恩田英男・越谷長男・寺田国雄・葭葉嘉亮・

　　葭葉たか・板村昇一・板村フジ・小倉武子・野口文子

4. 調査期間は、昭和59年4月～昭和60年3月である。
5. 調査に併う経費は、国庫補助・県費補助を得て館林市が負担した。
6. 本報告書の図面作成・トレース・写真撮影は、藤坂が中心になって行い、文章・編集は、三田・岡屋・藤坂が行った。
7. 本報告書中、ローム・擾乱・焼土等には、トーンを使用した。
8. 調査から、報告書刊行にあたり諸氏、諸機関に御指導、御教示、御協力いただいた。
感謝いたします。

本文目次

例　　言	1
本文目次	2
図版目次	3
写真目次	3
第Ⅰ章　遺跡の位置と環境	4
第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	5
第Ⅱ章　遺跡の内容	7
第1節 調査に至る経過	7
第2節 調査の方法と経過・内容	10
第3節 出土遺物	11
土　　器	11
石　　器	16
第Ⅲ章　調査を終えて	17

図 版 目 次

第1図 遺跡現況図	5
第2図 周辺の遺跡	6
第3図 調査区全体図及び土層状況断面図	8~9
第4図 土器実測図及び拓影(1)	12
第5図 土器実測図及び拓影(2)	13
第6図 石器実測図	16

写 真 目 次

写真1 遺跡全景	4
写真2 発掘風景	7
写真3 土器(A)・(B)	14
写真4 土器(C)~(G)	14
写真5 拓影土器(1)	14
写真6 拓影土器(2)	14
写真7 土器(H)・(I)	15
写真8 土器(J)	15
写真9 土器(K)	15
写真10 土器(把手部分)	15
写真11 石器	16

第1章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

上の前遺跡は、館林市街地の東南方、東武鉄道伊勢崎線館林駅のおよそ3kmの所に所在する。館林・邑楽地方を中心とする「館林・邑楽台地」は、比較的標高の低い低台地である。

北を渡良瀬川、南を利根川で区画された本台地は、平野の中にぽっかり浮んだような状態であり、周囲は、利根・渡良瀬川の沖積低地によってかこまれている。

台地と低地の境は、台地上に降った水の侵食による小谷により複雑にきざまれており、その谷頭には、数多くの池沼や谷地が形成されている。

この地形は、館林・邑楽地方を代表する景観となっている。

低台地と低地との比高は2～3メートル程で、崖状を呈するところが多い。

遺跡は、谷頭に所在する蛇沼が、南に向って広がる地域に面する台地南斜面に位置している。

台地と、低地の境は、比高1メートル程の崖状となっている。

現地形では、比較的出入りの少ない広い台地である。

遺物は、台地上から低地へと広がって確認されている。



写真1 遺跡全景

第2節 歴史的環境

本遺跡周辺の遺跡をあげるならば、城沼から蛇沼・茂林寺沼にかけては、縄文時代の遺跡が多い。

この周辺は、標高20mほどの台地が続いているが、遺跡は、台地の縁辺にそって所在している。

城沼南岸の大袋Ⅰ・Ⅱ遺跡は、縄文時代早～中期の遺跡である。

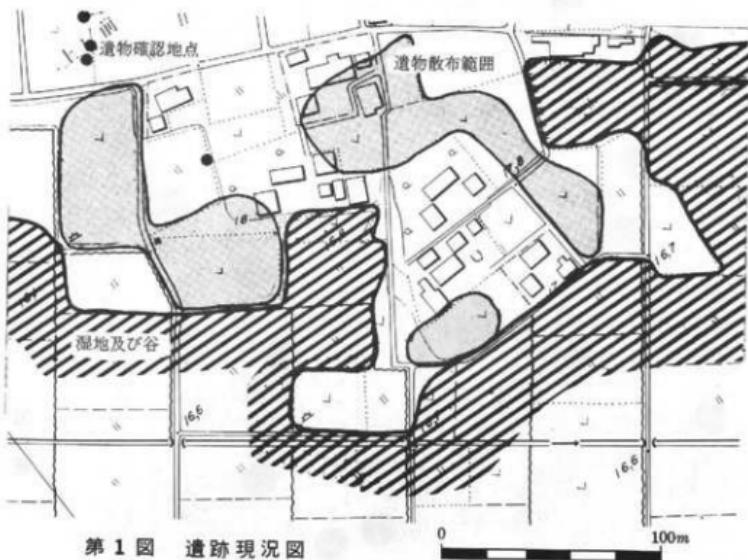
昭和55年～57年に行なわれた調査では、大袋Ⅱ遺跡では、早期の炉穴・前～中期の住居址が大袋Ⅰ遺跡では前期の遺物が確認されている。

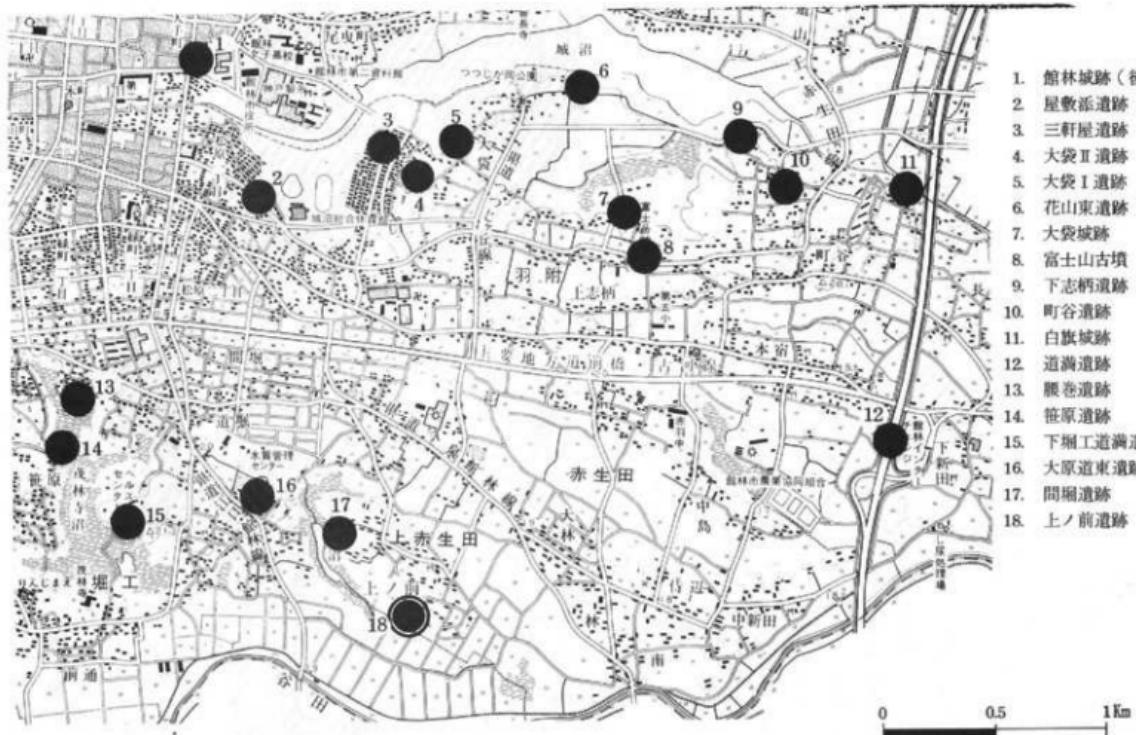
また、花山東・下志柄・三軒屋遺跡等においても、調査はされていないものの、前期の遺物を出すことが確認されている。

本遺跡の周辺である、蛇沼・茂林寺沼周辺では、縄文時代後期～晩期の大規模な遺跡が多い。

大原道東遺跡では中～晩期の遺物が、間堀遺跡では、前期・中期の住居址が調査されている。

昨年からの分布調査においても、能野神社付近で中期～後期にかけての大規模な遺物の分布が確認されているなど、この遺跡周辺には、中期～晩期にかけての遺跡が多い。





第2図 周辺の遺跡

第Ⅱ章 遺跡の内容

第1節 調査に至る経過

上の前遺跡は、昭和48年刊の群馬県遺跡台帳には、登載されていない遺跡である。

一昨年、近くの住民より、用水路を掘削したおりに土器が出土したとの連絡をうけ現地におもむいたところ、地表下約70cmのところから土器片が出土しているのが確認された。

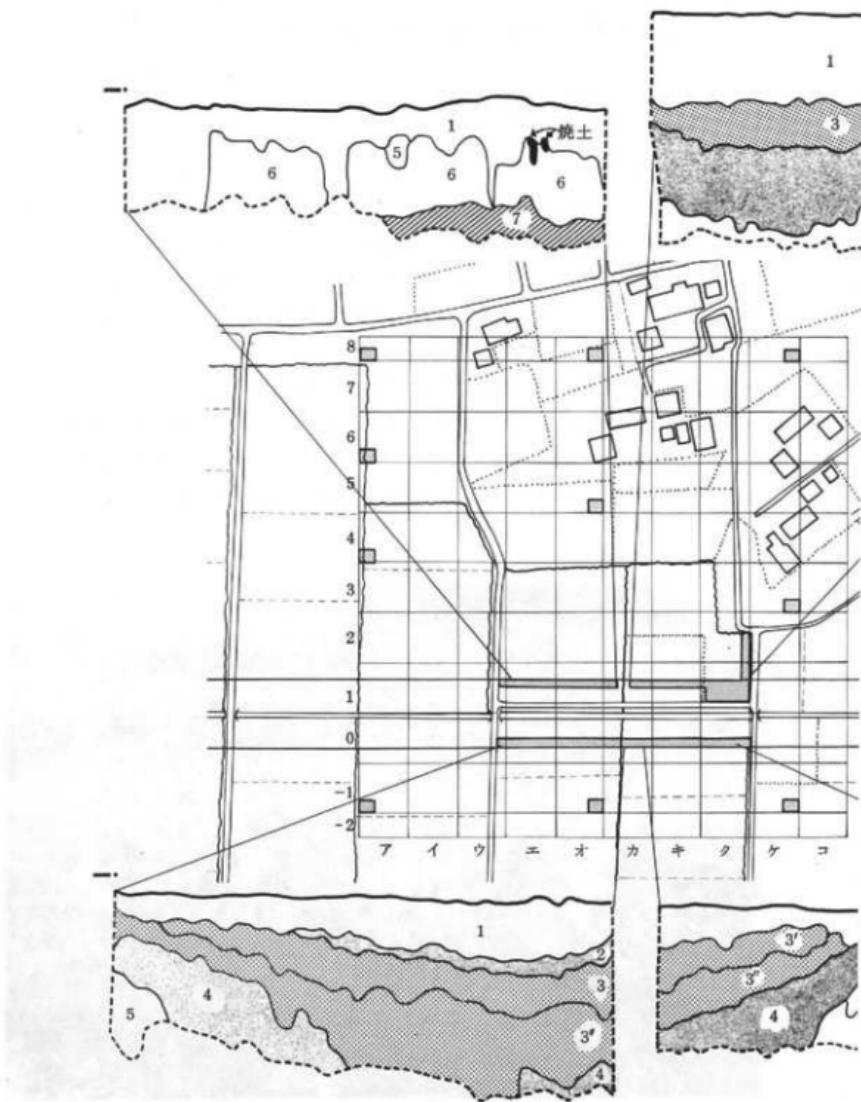
しかし、土器の出土をみたところは、台地上からかなり下った沖積地であり、耕地整理も終了した地域もあるため、土等も搅乱されており、同地下に遺跡の存在があるかどうかは、不明であった。

出土遺物の時代は、縄文中期加曾利E式～晚期初頭までみられた。

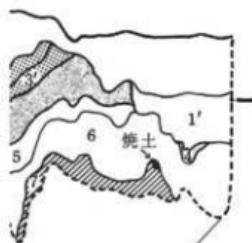
このたび、同地一帯で河川改修の計画がなされ、上述のような理由もあり、遺跡が存在しているかどうかを確認するとともに、その範囲、深さ、時代、規模等を確認したうえで、台帳台載をはかり、河川改修計画との調整をはかるために、確認調査を実施することとした。



写真2 発掘風景



第3図 調調区全体図及び土層状況断面図



土層注記

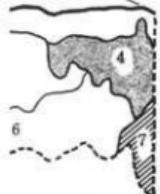
- 1層 暗褐色土層 粘性有。繊り強。現在の耕作土。谷地ではグライ化が進行。
- 1'層 暗褐色土層 粘性有。繊り有。1層に極似。1層よりやや暗い。
- 2層 暗褐色土層 粘性有。繊りやや有。4層に極似するが色調は明るい。その上層に火山灰(浸間B)を純層に近い状態で載せる(厚さ8~15mm程度)
- 3層 灰白色土層 粘性強。繊り強。鉄分を含む。粒子は細い。
- 3'層 灰白色土層 粘性強。繊り強。3層に極似するが鉄分が少ない。粒子は細かい。
- 3''層 灰白色土層 粘性強。繊り強。3層、3'層に極似するが、3層、3'層に比べ暗褐色土層の薄い層(厚さ1~2mm程度)と互層を成す。(灰白色土頂のほうが厚く、多量)
- 4層 黒褐色土層 粘性やや有。繊り弱。2層に極似するが植物遺体(未分解泥炭)を多く含む。また南区東端、南区西端の1層に近い部分は鉄分を多量に含む。
- 5層 褐色土層 粘性やや有。繊りやや有。6層へは漸移的に変化する。多量に鉄分を含む。
- 6層 暗褐色土層 粘性やや有。繊り有。5層より暗い。ローム漸移層。
- 7層 褐色土層 粘性やや有。繊り有。ソフトローム層。

* 遺物は1・2・4~6層中より出土。

0 50m
(平面図スケール)

* 土層断面図は垂直方向の
縮尺を強張してある。

1m
(断面図垂直方向スケール)
0 1.0 20m 0
(断面図垂平方向スケール)



第2節 調査の方法と経過・内容

本地の確認調査は、まず周辺の踏査を実施することから行った。

前述の遺物出土地点を中心に、周辺の台地および、沖積地の地形復元と、遺物の散布状況の確認から、遺跡の中心を求めていった。

これによると、周辺はすでに耕作整理がおこなわれた地域であり、現況は、昔とずいぶん変化していることが確認された。

かつては、古状台地が、沖積地にむかって突出しており（キ・ク・ケー1・2G）現在でもその痕跡が一段高い部分として畠地になっている。（カ・キー1・2G）

耕作整理は、かなり大がかりにおこなわれたとのことで、台地上の土を低地に流し、レベルの調整をはかっている。

又、カ・キー4G付近では、現在も澆水があるとみられ、常に、じめじめしている。

遺物は台地上に多量に確認された。その時期は、縄文中期・加曾利E式から、後期・加曾利B式、安行式を中心に、晩期初頭まであり、低地中で出土した土器と時期は一致した。

遺物の散布量は多量で、畠の畔に農家の人の手によって積まれていたり、石斧等は、近所の農家に保管中のものもあった。

このような結果をもとに、土器の出土地点を中心に、一辺20mのグリットを組んだ。

グリットは、南北に、11グリット（-2～8列）東西に10列（ア～コ列）の110グリット設定した。

確認調査は、台地上・台地下・低地中に、1×1mの坪掘りを行い、土の状況の確認、遺物の有無・遺構の有無を確認した。ア-8・ア-6・ア-1・オ-8・オ-5・オ-1・ケ-8・ケ-3・ケ-1Gである。

これによって、台地上から、低地への土の移動があること、低地は深いこと、低地にむけて突出したやや低い台地があることなどが明らかとなった。

このようのことから、この台地部分（ク-1・2G）を中心に調査を実施したが、遺構等の確認はできなかった。

また、河川改修との関連から、予定地域にトレーンチを入れ、土層状況等の確認をしたが、同地には、深い谷が存在していることが明らかとなった。

第3節 出土遺物 土器

まず、最初に述べておきたいが、現在遺物整理の途中であり、以下説明する遺物は、出土した遺物のほんの一部である。今後、遺物整理の進行に伴ない、復元個体等増えるものと思われる。御了承願いたい。

[A]は、地元の人より提出された土器であり、その出土状況等は明確ではない。しかし、数ヶ所欠損しているものの完全に近い形で復元できたところから、一括に近い状態で出土したのではないかと思われる。器形は椀形を呈している。口唇部より約1cmの外部器面に口唇に沿って2本の沈線を施し、さらに等間隔でもう一本沈線を施すが、この沈線は一周せず途中より底部へ向かい緩やかに円弧を作りながら下降し、かつ交差する。また交差しき円弧の内側に平行する沈線を施す（右側2本、左側1本）。器厚は薄く、焼成は良好。縄文時代後期加曾利B式に比定できる。

[B]は、6層中より出土したミニチュアの土器である。器形は椀形であるが小さく、実用品としてではなく作られたものと思われる。外部器面の口唇部より約5mmのところに、等間隔で3ヶ所突起があり、各突起より放射状に4本または5本、各突起間に円弧を描きながら沈線を施す。底部によりには、ほぼ平行する2本の沈線を施す。やはり縄文時代後期加曾利B式に比定できよう。

[C]は、6層中より出土した土偶の一部である。おそらく右手であろう。沈線と細かい縄文によって施文装飾されている。

[D]は、6層中より出土した土錐である。半分欠損しているが、長軸上中央を一周するものと思われるひも掛け溝が施されている。

[E]は、4層中より出土した耳栓である。次に説明する[F]と比べると粗製であるが、鼓状の円筒を呈する。

[F]は、6層中より出土した耳栓である。中央には穴を穿ち、中央で交わる三つの渦巻き状の装飾を一面に施し、丁寧に作られている。

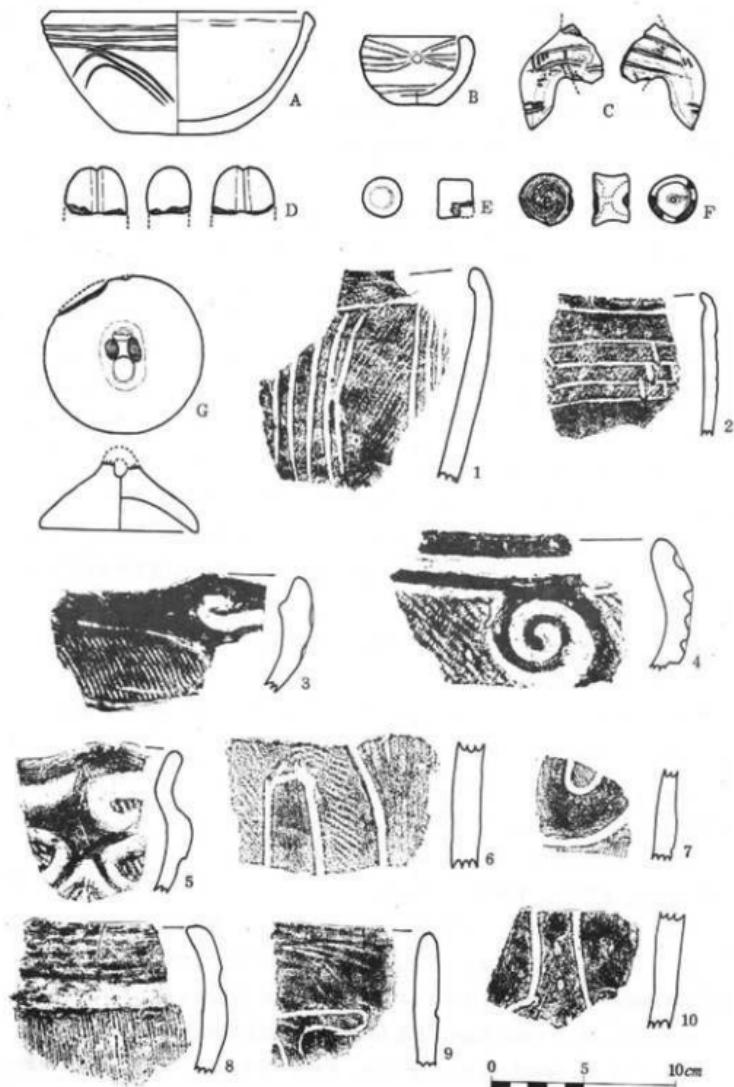
[G]は、6層中より出土した土器の蓋と思われる土器である。把手を欠いている。

[1]・[2]は、本調査に先だつ、周辺の踏査により採取された土器片である。[1]は縄文時代後期縄ノ内式に、[2]は後期加曾利B式にそれぞれ比定できよう。

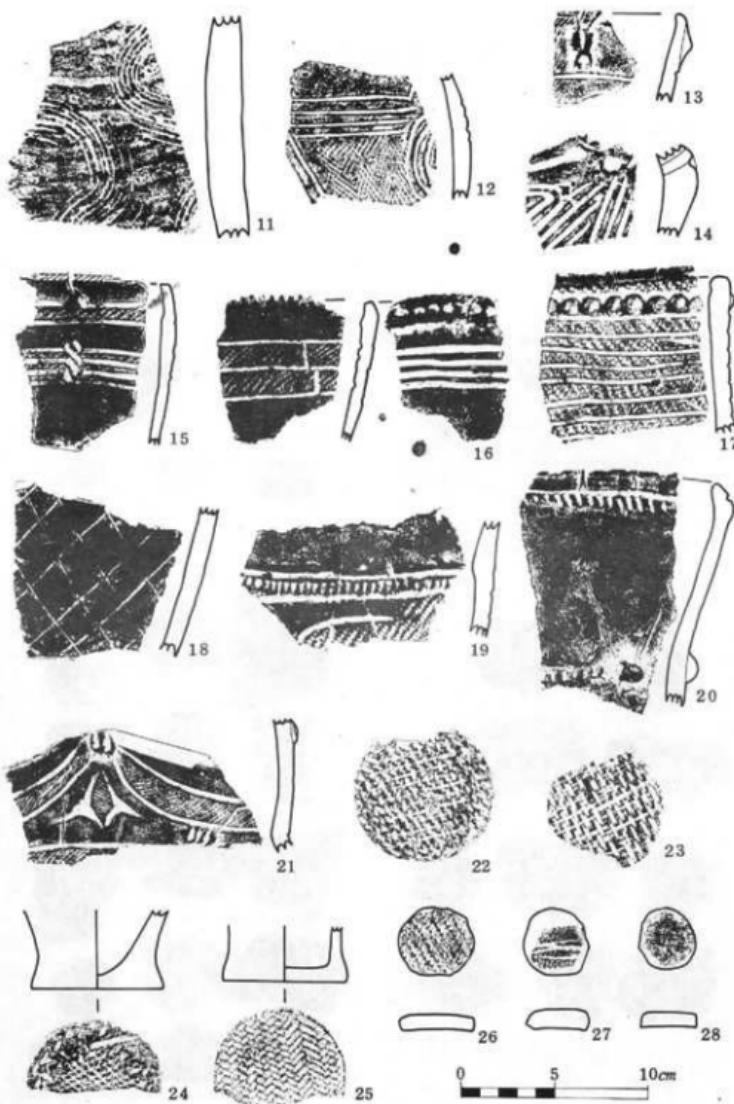
[3]～[5]は、いずれも中期加曾利E式に比定できる深鉢土器の口縁部破片である。

[6]～[11]は、後期称名寺式に比定できる。[6]・[7]は太い沈線で区画し、磨消縄文を施す。[8]・[11]は粗製土器である。

[12]～[14]は、後期縄ノ内式に比定できる。[12]は、円弧を描く沈線と、平行沈線及



第4図 土器実測図及び拓影(1)



第5図 土器実測図及び拓影(2)

び縄文で、丁寧に施文されている。

〔15〕～〔18〕は、後期加曾利B式に比定できる。〔16〕は、先の表掲資料と類似する文様を施され、口縁は細かい波状を呈する。内部器面に、刺突文と、平行沈線を施す。

〔19〕・〔20〕は、後期安行I式に比定できる。〔20〕は、粗製土器である。

〔21〕は、縄文時代晚期安行II式の土器片である。

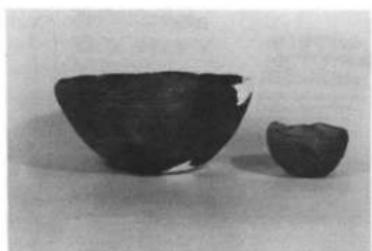


写真3 土器(A)(B)

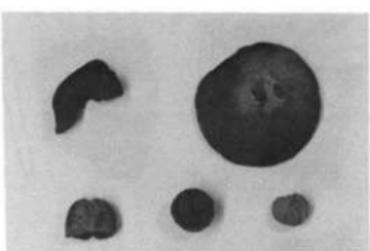


写真4 土器(C)～(G)

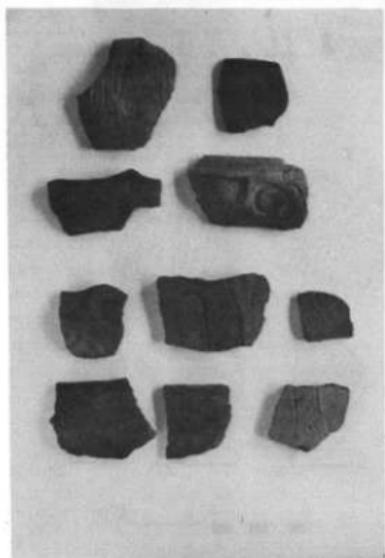


写真5 拓影土器(1)

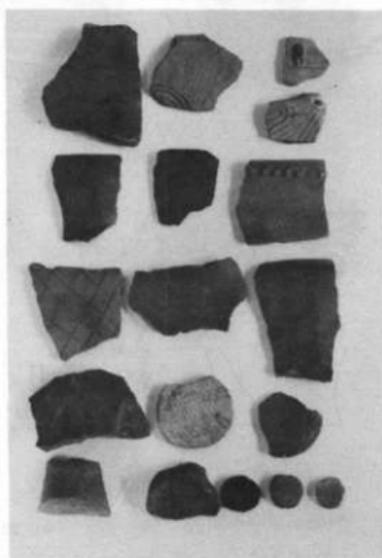


写真6 拓影土器(2)

〔22〕～〔25〕は、網代痕を持つ底部の拓影及び実測図である。

〔26〕～〔28〕は、土製円盤の拓影及び実測図である。

次に、部分的に復元できる土器の説明をしてみたいと思う。（写真のみ）

〔H〕・〔I〕は、縄文時代後期安行I式に比定できる深鉢土器の一部である。平行する沈線により区画をし、縄文を施す。口径は共に約20cm前後になるものと思われ、焼成も良好である。

〔J〕も、縄文時代後期安行I式に比定できる深鉢の一部である。口縁は波状を呈し、波頂部・底底部には縦に隆帯を付し、平行する沈線をもって区画を施す。区画内は縄文を施文し、これらの文様帶の下に、円弧状に沈線を平行かつ交差させ、第2文様帶を形成する。

〔K〕は、縄文時代後期加曾利B式に比定できる粗製の深鉢の土器である。口唇部及び口唇から、約9cmのところに隆帯を施す。隆帯の間は、円弧状に斜めの沈線を施す。器厚は薄く、焼成も良好である。

写真10の遺物は、把手部分であり、縄文時代中期～後期の長期間に及ぶ。

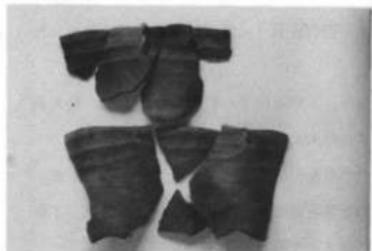


写真7 土器(H)・(I)

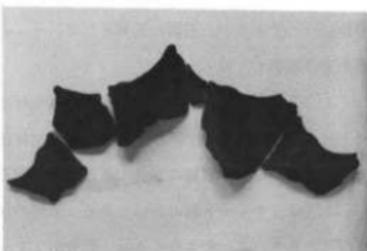


写真8 土器(J)

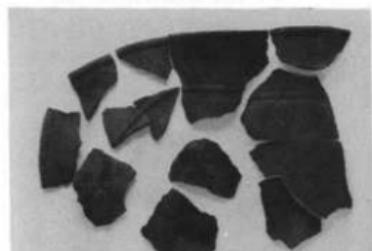
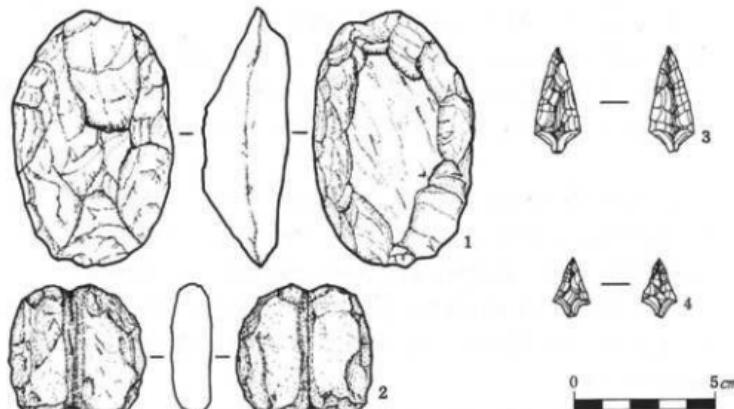


写真9 土器(K)



写真10 土器(把手部分)

石器



第6図 石器実測図

以下、石器について説明する。やはり、出土した石器のほんの一端である。また、本遺跡の特徴の一つであるが、石器の石質として、チャート（青白珪石）・縁泥片岩の石器の多かった事を先に説明しておく。

〔1〕は、砂岩製の石斧である。調整は全体に及び、丁寧な作りの打製石斧である。最大長9.3cm、最大巾5.7cm、高さ3.0cm。刃部主体部は長軸両端で、銳利に作出されている。

〔2〕は、縁泥片岩製の石鎌である。片平な石の中央を一周する、ひも掛け溝を作出する。

〔3〕は、チャート製の石鎌である。基部凸状の有茎石鎌であり、調整は全面に及び、丁寧な作りをしている。最大長4.0cm、最大巾1.7cm、高さ0.5cm。

〔4〕も、〔3〕同様チャート製の石鎌である。やはり基部凸状の有茎石鎌であり、〔3〕よりも小さいが、調整は全面に及び、丁寧な作りである。〔3〕同様、縄文時代後期の石鎌としての特徴を良く示している。

以上の石器の他に、定形石器では石皿・磨石・石棒の一部・分銅型石斧等出土している。

また剝片（フレーク）・石核（コア）も多數出土していることも付け加えて、説明を終えたい。



写真11 石器

第Ⅲ章 調査を終えて

最後に、調査において確認されたことをあげてまとめとしたい。

調査は、踏査・坪掘り・試掘とわけて行なった。

踏査では、遺物の散布状況の中心が台地上にあること、耕地整理の規模が大きかったこと等が確認できた。

坪掘り・試掘においては、耕地整理の土の移動状況、低地中には遺物の出土はみられるが、谷の深いことなどから遺構の存在はないことが確認できた。

このようなことから、上ノ前遺跡の中心はやはり、台地上であるということができよう。

低地中から出土する遺物は、谷埋没に伴う流れ込み、耕地整理の際の土の移動に伴う流入等と考えることができよう。

昭和5・6年度調査を実施した大原道東遺跡においても同じように斜面に向って多量の遺物の流れ込みが確認されている。

出土遺物の時期についても、今回の調査は、大原道東遺跡と同じものである。

このようなことから、この縄文時代後期において、地理的環境上に、大きな変化がみられたであろうことを予想させる。

また最近、低地中における後晩期の遺跡等の報告等もあり、この時期の遺跡については、再度検討する必要があろう。

館林市埋蔵文化財発掘調査報告書 第12集

上ノ前遺跡発掘調査報告書

編集・発行 館林市教育委員会

印刷 オーラ印刷有限会社

発行日 昭和60年3月31日



文化財愛護シンボルマーク

ふるさとの文化と歴史を見なおそう